

全国公立学校難聴・言語障害教育研究協議会 第1回 全国理事会

日時：令和6年5月11日 13時～16時30分

場所：世田谷区立駒沢小学校 ランチルーム

<会長挨拶>

世田谷区立駒沢小学校 校長 鈴木 聡

本日はお忙しい中、全国各地よりお集まりいただき、ありがとうございます。昨年度の埼玉大会を通し、改めて全難言協は非常に多くの方々に支えられているのだと感じた次第です。本日も各都道府県の実践を共有する機会になればと思います。



<来賓挨拶>

文部科学省 初等中等教育局特別支援教育課 特別支援教育調査官 村上 学 様

特別支援教育に関する保護者の理解や認識の深まりとともに、特別支援学級に在籍する児童、通級指導学級を利用している児童の数は増加の一途をたどっております。障害のある児童が、障害の状態に応じた十分な教育を受けるためには、特別支援学級、通級指導学級を担当する教師の専門性を高めることが必要です。求められる専門性は非常に多岐に渡りますが、各学校で専門性が十分に継承されていないという声も聞きます。他校の担当教員と指導方法について共有する場を設定すること、力のある教師を中核とした支援体制を整備することを改善策として提示しているところです。



世田谷区教育委員会事務局支援教育課 課長 中塩屋 大樹 様

世田谷区では、早い時期に必要な支援につながるができるよう、特別支援教育の充実とインクルーシブ教育の推進に取り組んでおります。ハード面、ソフト面両方の充実を図るとともに、子供や保護者の意思を尊重し、すべての子供が共に学ぶことのできる環境や体制の整備を進めていきます。



国立特別支援教育総合研究所 情報・支援部 統括研究員 滑川 典宏 様

全国理事会にてご縁をいただき、全国を実際に回ってお話をさせてもらっていますが、現状の課題を痛感しているところです。今後も、皆様からいただいた情報を全国に発信していき、今の時代に大切なことは何か、一緒に考えていきたいと思っております。



NPO 法人 全国ことばを育む会 副理事長 宮本 紀子 様

「NPO 法人 全国ことばを育む会」は、先生方のご支援があってこそこの会です。近年、休会する都道府県が増えてきていますが、存続には先生方のお力添えが不可欠です。以前は、親の会の運動によって、ことばの教室が増えていったという歴史があります。ぜひ、これからも言語に特化した親の会を続けていきたいと思っています。昨年度はWEBで全国大会を行いました。来年は岩手県で実施しますが、その先が続かない現状があります。ぜひ、皆様にご協力をいただきたいと思っています。



<小川再治研究協賛会について 事務局長より>

小川再治先生は、平成4年度まで東京学芸大学で教鞭を執られ、ご勇退後に、難聴・言語障害教育の振興、発展及び後進の育成に役立てるため、小川再治研究協賛会を設立されました。全日本聾教育研究会と、全国公立学校難聴・言語障害教育研究協議会が協賛金をお預かりしています。奥様である会長の小川昭子先生はご高齢のために本日ご欠席ですが、全難言協に送っていただきました手記をホームページに掲載しております。設立の経緯や、毎年大変貴重なお金をお預かりしているということを各都道府県の研究会でも周知してください。

<議事>

- 令和5年度 事業報告、決算報告 承認
- 令和6年度 新役員案、事業計画案、予算案 承認
- 令和5年度 第52回全国大会 埼玉大会 実行委員会より御礼

○令和6年度 第53回全国大会 沖縄大会についての概要説明・大会宣言案

沖縄大会は、令和6年8月9日（金）、10日（土）に「那覇文化芸術劇場 なは一と」にて行います。受付後のアトラクションとして、ホワイトハンドコーラスの演奏を行います。ホワイトハンドコーラスは、手話で歌うサイン隊と、声で歌う歌唱隊とで構成される合唱団です。県内の難聴学級に通う子供たちもメンバーとして頑張っています。全国の先生方に大きな感動を届けることができるアトラクションになると思います。記念講演は国立特別支援教育総合研究所の牧野泰美先生に、基調講演は文部科学省の村上学先生にお願いしております。2日目は、分科会がメインになります。もし、台風で対面参加が難しくなった場合は、全てオンデマンドのBコースに切り替えて対応できるように考えています。たくさんの先生方の参加をお待ちしています。



- 令和7年度 第54回全国大会 東京大会についての挨拶・現状報告
- 全情研事務局長より 令和5年度 埼玉大会共同開催について御礼

<国の特別支援教育施策について>

文部科学省初等中等教育局特別支援教育課 特別支援教育調査官 村上 学 様

○特別支援教育を受ける児童生徒の数について

この10年で、全体の児童生徒数が1割減少している中、特別支援教育を受ける児童数は倍増しました。特別支援学校（聴覚）の児童数は1割減、特別支援学級の児童数は、言語障害が減少傾向、難聴が増加傾向にあります。通級指導を受けている児童数は、言語障害が10年前の1.4倍、難聴が横ばいとなっています。難聴は、年々特別支援学校で学ぶ児童が減っており、難聴学級で学ぶ児童が増えています。言語については、97%の児童が通級指導を受けています。

○担当教員の配置や専門性の維持について

令和4年3月に「特別支援教育を担う教師の養成のあり方に関する検討会議の報告」をまとめました。現場の教員には、高い専門性が求められますが、長期的、計画的に育成、配置されているとは言い難い現状があります。小学校では、特別支援学級担任の臨時的任用教員の割合が23.69%で、通常学級担任における割合（11.49%）のおよそ2倍となっています。中学校では、特別支援学級担任における割合が23.95%で、通常学級担任における割合（9.27%）のおよそ2.5倍となっています。また、初めて特別支援学級を担当する先生や、「初めて」でかつ一人担任の先生の割合も高いです。

一つの要因として、管理職に特別支援教育の経験や理解が不足していることが挙げられます。調査によると、小学校で66.4%、中学校で69.3%の校長が、特別支援教育の経験がないという実態が判明しました。各都道府県教育委員会に対して、管理職選考の際に特別支援教育の経験を加味して判断するようお願いをしています。

○通常学級に在籍する障害のある児童生徒をサポートするために、大切なポイント

1. 校内体制の充実

校内でしっかりと子供たちを把握できるようにする。

2. 通級による指導の充実

児童が慣れた環境で指導を受けることができるように、校内通級、巡回通級の充実を図る。

3. 特別支援学校のセンター的機能の活用

センター的機能を活かして地域内で子供たちを見ていけるようにする。

4. インクルーシブな学校運用モデル

小中学校と特別支援学校を一体的に運用していくモデルを検討する。

○文部科学省が作成したガイドブックについて

1. 初めて通級による指導を担当する教師のためのガイド

2. 聴覚障害教育の手引

3. 障害のある子供の教育支援の手引

ホームページでの閲覧が可能で、オンラインで講義の配信も行っています。ぜひ活用してください。

<国立特別支援教育総合研究所より>

国立特別支援教育総合研究所 主任研究員 谷戸 諒太 様

令和6年の研修事業は、特別支援教育専門研修の第一期、言語障害教育コースが5月13日（月）からスタートします。昨年度に引き続き、オンラインと対面で行います。第二期は、知的障害教育コースとして9月10日から、第三期は、視覚障害・聴覚障害・肢体不自由・病弱教育コースとして1月8日から行います。研修生の皆様にとって、実りある研修となるように、言語班一同、支えていきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。



<NPO 法人全国ことばを育む会より>

NPO 法人 全国ことばを育む会 副理事長 宮本 紀子 様

保護者の中には、先生と一緒に子供を育てていこうという熱意のある方がいらっしゃいます。以前、ある保護者が中学校に合理的配慮を求めたところ、「一人だけ特別扱いはできません。」と言われたそうです。その後、このような現状を変えたい、中学校にことばの教室を開設したいと、保護者は働きかけました。しかし、その願いは叶わぬまま、お子さんは高校生になってしまいました。

現在、ことばを育む会は23都道府県にまで減少してしまいました。そんな中でも、先生方が一生懸命指導してくださっている姿を見て、頑張っている保護者がいます。ぜひ先生方も、保護者とともに育っていく、という気持ちになっていただくとありがたいと思います。保護者は、子供の情報をよく知っています。ぜひ保護者と交流を深め、保護者から情報を受け取り、繋がりを生かしていただければと思います。

私自身も、教員をしておりました。教員の立場で子供たちや保護者と出会い、その熱意に動かされてことばを育む会に携わるようになり、長い時間がすぎました。私も頑張っていますが、ぜひ先生方のお力をお借りしたいと思います。会が存続しているところは、ぜひなくさないように応援してください。どうぞよろしくお願いいたします。

<各都道府県の情報交換 抜粋>

○専門性向上のための取り組み

- ・オンラインでの研修、宿泊研修などを行っている。
- ・全国大会、地方大会などに出席した教員が、研修報告会を行っている。
- ・STを招聘しての構音検査の研修をしている。
- ・設置校校長も研修に参加してもらっている。
- ・授業を見せ合う自主研修を行なっている。ろう学校にアドバイスをいただいている。
- ・成人した退級児童を招いて、その後の体験談を聞く会を実施している。
- ・発達障害を担当する先生と合同で研究会を行なっている。
- ・大学と市町村が合同で研修事業を行なっている。
- ・中学校、高等学校受験の合理的配慮について情報を共有している。
- ・教員採用に、特別支援教室採用枠を設けている。
- ・特定の領域について学びたい教員が集まって研究会を行なっている。

- ・将来的に通級指導を希望している先生も研修に参加できるようになっている。
- ・動画配信と対面での分科会を併用した研究大会を予定している。
- ・人事において、通級の専門性維持に配慮をいただいている。



○その他の取り組み

- ・ことばを育む会との連携を図っている。
- ・言語障害以外の児童も受け入れ、不登校の児童とオンライン授業をしている。
- ・サテライト方式により、遠方でも通級できたり、保護者の負担が軽減したりしている。
- ・障害種を問わない教室を作る流れがある。

○課題

- ・担当者が毎年変わるので、専門性の確保が難しい。3年未満の教員が多い。
- ・県内で集まることが難しい。オンラインでの研修を検討している。
- ・情緒と合同で研修するため、発達障害の研修が多くなりがちである。
- ・幼児支援をどのように行うのが望ましいか迷う。
- ・研究会の構成人数が年々減少している。再任用教員の比率が増えている。
- ・幼児期に療育を受けていた子供が、就学後ことばの教室に繋がらない。
- ・全国大会開催経験のある教員がいない状態で、どのように開催するべきか分からない。
- ・サテライト方式のため、在籍校の仕事がしづらい。
- ・ろう学校に難聴通級を設置してほしいと伝えているが実現しない。
- ・特別支援教室の児童が急激に増加しており、教員が不足し、欠員も生じている。
- ・固定の自閉症学級が増えているが、明確なガイドラインがない。
- ・近隣の先生同士で集まり研修していたが、講師になれる先生が見つからない。
- ・所見の書き方が分からない先生が多い。統一した基準を作っている。
- ・教員一人が担当する児童数が多くなってきている。
- ・固定級から通級、巡回指導へ移行している。設置校が減っている。
- ・対象児童が居なくなり、人以下の学級や、閉級した学級がある。
- ・通常学級担任を務めることが難しい教員が通級に回されがちである。



以上